

【 視 点 】

Bプランと街並み形成

東京工業大学大学院社会理工学研究科
教授 中井 検裕

先日、環境先進国ドイツで環境首都とも呼ばれているフライブルグを訪問した。目的はドイツのエコ団地視察だったが、その中で、ポーバンとリーゼルフェルトと呼ばれる2つの住宅団地開発を訪れた。ポーバンはフランス駐留軍の兵舎跡地開発で約40ヘクタール、リーゼルフェルトは市西側の新規開発で約70ヘクタールと、いずれも1990年代から始められた大規模な住宅団地開発で、雨水利用やカーフリー、省エネ住宅など環境共生への積極的な取り組みで有名な開発である。

しかし、そういった環境への取り組みもさることながら、さらに興味深かったのはBプランと街並み形成の関係だった。わが国では、ドイツのBプランといえば、極めて詳細かつ厳密に建物環境をコントロールすることによって、統一された街並みを作り出す道具としての認識が一般的である。しかし、ポーバン、リーゼルフェルトともに、Bプランで一定程度のコントロールは行いながらも、個々の区画内のデザインについては、多様なデザインを許容する方針をとっている（写真1、2）。フライブルグ市当局の説明の中でも、建築物のデザインに関しては、歴史的市街地は別として、これまでのあまりに厳密なコントロールから、現在は個々の建物については、一定の範囲内でできるだけ自由を認める方向に変わってきているとの話だった。

その結果の街並みは、なかなか見応えがある。両団地とも、区画は原則として1つ1つ個別に分譲されており、その大きさはドイツの平均的な住宅地と比べると小さい。それが、あるところでは1つずつ、別のところではいくつか統合されて共同住宅の形式をとっており、それぞれのデザインは実に多様である。しかしながら、街路と両側の住宅高さの関係、壁面の位置、敷き際の利用などはそれなりにコントロールされている。その結果、全体としては統一性を有する空間構成の中で、街並みには極めて不規則なリズムの変化が生まれている。

わが国でも昨年、景観法が成立し、景観計画や景観地区、景観協定といった良好な景観を創り出すための仕組みがようやく整った。しかし問題は、どのようにしてそれを使いこなすかである。歴史的市街地のように建物の様式が明確な地域では、様式に従ったコントロールを考えればよいから比較的簡単である。しかしわが国の市街地のほとんどは、そのような様式上の規範に乏しく、また変化も激しいという特徴がある。そのような市街地で景観コントロールを考えるには、景観を規定するどのようなパラメータをコントロールし、逆にどこから先は自由にするかを判断することが難しい。

ポーバンやリーゼルフェルトの街並み形成には、個別の建物にはできるだけ自由を与えながら、かつ良好な景観を形成するためのヒントがありそうだ。それらはデザインのディテールや色や材質の「統一」というよりは、建物の「連続性」の範囲の捉え方に関係しているのではないかと思う。少し時間をかけて、Bプランと街並みの関係を分析したいと考えている。

写真1 ポーバンの街並み



写真2 リーゼルフェルトの街並み

